

「私が、今、この演奏家に注目する理由」

伊藤美由紀（2400 文字）

筆者の作曲家の立場から、近年、演奏に度々関わって頂いた演奏家の中から注目する奏者として、ギター奏者であり、指揮者でもある佐藤紀雄さん、箏奏者の木村麻耶さんの2人について、客観的な観客の視点からと個人的に関わってきた経験から、最新の海外公演ツアーの内容を含めてお二人の魅力について紹介したい。

最初に、佐藤紀雄さんのアンサンブルでの活動について言及したい。1997年にアンサンブル・ノマドを結成し、音楽監督として、毎回、新鮮で刺激的なテーマにより、あまり日本で取り上げる事のない作曲家の作品を含んだ個性的なプログラムに挑戦し200回を超える演奏会を実現してきた。2017年は20周年記念公演として、「饗宴 ~メンバーによる協奏曲集~」と題し、メンバー全員がソリストとして登場するプログラム構成の定期演奏会を4回開催した。ノマドの演奏会を聴いていつも感じるのが、内容の濃さ、演奏の質の高さのみならず、演奏家各々が楽しみながら演奏をしているというのを、音楽を通して体感でき、音楽空間を共有しているという充実感を味わえることである。始めて聴く作品、初演の作品も含み、必ずしも知っている作品の演奏でなくとも、観客の心をつかみ、作品の真髓まで理解して楽しんで演奏しているのを感じられるのは、佐藤さんの人柄、魅力が、アンサンブル全員の心をまとめ、全員の信頼感から生まれたものであると思う。それらの成果は「第2回佐治敬三賞」を始め、オランダ、ベネズエラ、パリ、メキシコ、イギリス、ソウルなどの海外の国際音楽祭への招聘、「サントリーサマー・フェスティバル2016」のプロデュースに及ぶ。今回は紙面の都合上もあり、佐藤さんのみに焦点をあてるが、メンバー各々も、ソロ活動から多様な魅力的な演奏活動を行っており今後の活躍が楽しみである。

次に筆者が関わった公演から、佐藤さんの魅力を追求したい。最初の公演は、愛知県芸術劇場主催によるギター、オンド・マルトノ、クラリネット、エレクトロニクスによる4セクションからなるダンス・コラボ作品の《プロメテウスの光》である。第1部のギターとエレクトロニクスの《発火点》は、2011年の初演以来、国内、メキシコ、スペインで既に10回も再演して頂いている。彼の為に書かれた作品は、これらの作品に関わらずレパートリーとして、色々な公演で再演して下さる。多くの方に作品を聴いて頂け、毎回、新たな発見をし、

作曲家として光栄である。2曲目のギターと二十五絃箏の為の《絃の独白》は、木村麻耶さんと最初に関わることになった作品でもあり、筆者の企画するニンフェアール第10回公演『西洋と東洋の絃』で初演して頂き、「第14回佐治敬三賞」を受賞した公演でもある。その他にエレキギターとエレクトロニクスの為の《向こう側》、2台ギターの為の《二重星 III》、メキシコで初演されたばかりのアンサンブルとギター、二十五絃箏のための《結晶化した数字》の5作品が、佐藤さんにより初演されている。毎回、音楽の魅力を最大限に引出して下さり、その演奏は、作曲家としての新たなアイデアを喚起させてくれ、ギターの魅力に益々取り憑かれていく。

ニンフェアール公演後、結成された箏の木村麻耶さんとのデュオ「紡ぐ色」の他、第15回佐治敬三賞を受賞したソプラノの吉川真澄さんとのデュオ「うたほぎ」は、2枚のCDをリリースしている。ヴァイオリンの原田亮子さんとの「音の万華鏡シリーズ」、トランペットの佐藤秀徳さんとのデュオ「Barchetta」など、佐藤さんの呼びかけにより、次々と才能ある若手奏者とギターとのデュオを結成し、そのグループの為に作曲家達が新作を書き音楽の可能性を更に開拓し続ける意欲は、誰もが真似のできることはない。更に特筆すべき点として、彼に師事したギターのお弟子さん達の国内外での活躍である。山田岳さん、土橋庸人さん、大坪純平さんら他、ギターの現代作品を中心に活躍し、作曲家への委嘱など、精力的に挑戦的な企画に取り組んでいる。外国人のお弟子さん達も本国で活躍し、例えば、現在、メキシコ国立自治大学で教鞭をとるファン・カルロス・ラゲーナ、中国成都の四川音楽学院のジョセフ・ペレス・ミランディリアらがいる。彼らのつながりで、メキシコ、成都にはアンサンブルのみならず、佐藤さん個人で定期的に招聘され演奏会、セミナーなど教育活動を行う。著者も両国には佐藤さんと一緒に関わったこともあり、音楽家たちの佐藤さんへの敬意を深く感じた。各々の国で更に出会った作曲家達との交流も続き、バスケス、ロドリーゴの作品は、佐藤さんの公演でのプログラムのレパートリーの一部にもなっている。

今年2月に国際交流基金の助成、オニックス・アンサンブル、CMMAS（メキシコ電子音楽センター）のサポートにより、佐藤さん、木村さんとともにメキシコで、4回の公演、大学での3回のセミナーを開催してきたところである。ここで注目する2人目の演奏家として、箏の木村麻耶さんの魅力についてまとめてみる。現在、箏という楽器は、邦楽の古典のみならず、現代作品での使用

も含め海外での演奏も増えつつある。その中で、木村さんは、特に二十五絃箏による現代作品の公演に積極的にとりかかり、その新たな魅力を聴衆に広めている奏者の一人である。前述した佐藤さんとのデュオ「紡ぐ色」公演も、今年で5回目。5名の二十五絃箏によるグループ「4plus」では、二十五絃箏の普及と新作の初演を目的に定期的な演奏活動を行う。今年5月には、初のソロリサイタルも開催予定である。今回のメキシコ公演では、メキシコと日本の作曲家による作品をテーマに、デュオ作品では、バスケス、筆者の作品ほか、筆者の新作《結晶化した数字》を初演して下さった。桐朋学園芸術短期大学に日本音楽専修科とギター科が同年に設立され、合同で公演開催することも多く、そこから佐藤さんとの接点が生まれて、現在の活動に繋がっているようだ。個人的には、前述した2作品の他に、木村さん捧げた作品として4plusの定期公演で初演して下さった3面の二十五絃箏のための《コロボックル伝説》、中国の四川音楽学院で初演予定の二十五絃箏とエレクトロニクスのための《枯凋の美(IV)》がある。高い技術と音楽性をもつ彼女の演奏は、観客の心に訴え、彼女に関わった作曲家は一度のみならず、彼女の演奏に魅せられて2曲目、3曲目と新作を書いている作曲家が多い。

彼らの音楽に捧げる情熱は、聴衆の心に訴え、作曲家にインスピレーションを与えてくれる。今後の彼らの更なる挑戦的な活躍には目が離せない。